

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

-----  
日時：平成 22 年 12 月 4 日（土曜日）午後 14 時より午後 16 時

場所：AA 研 301 室

報告者名（所属）：福井玲（AA 研共同研究員、東京大学）

報告タイトル：「捷解新語の音注とテキスト分析」  
-----

### 発表要旨

捷解新語は朝鮮で 1676 年に刊行された日本語の教科書であり、日本語本文と、その発音を示すハングルによる音注、朝鮮語対訳という 3 つの部分からなる。本発表は、原刊本捷解新語の音注に関する部分とテキスト分析に関する部分の 2 つに分かれる。

音注に関しては、語頭の濁音の表記と、捷解新語の著者が接していたと思われる京阪アクセントの間に関係があることを示した。朝鮮語は当時も現在も語頭において有声・無声の対立を持たないが、捷解新語においては、ある種の語について、語頭子音に鼻音＋閉鎖音という 2 子音の連続が用いられている一方で、清音の場合と区別がつかない、閉鎖音のみで記されている場合がある。本発表では、前者の表記がなされるのは、京阪アクセントにおける高起式の場合であり、後者の表記は低起式の場合が多いことを示した。

	ガ行	ダ行	バ行
高起式	ŋk	nt	mp
低起式	k	t	p

このことは音声学的に次のように説明できる。一般的に有声音は対応する無声音に比べて低いピッチで発音されるが、低起式の場合、語頭の有声音の低いピッチが、アクセントによる低いピッチと相まっていわば無標のものとして聞きとられたのに対し、有声音でありながら、高いピッチで発音される高起式の場合にはそれだけ耳だって聞こえ、有標の表記が選択されたということである。ただし、鼻音を伴った表記の音声学的な実態についてはなお考慮する必要がある。また、この結果はこの音注を付けた人物は、当時の京阪アクセントを直接耳にしていたことを示唆する。但し、それを音の高低そのものではなく、それに付随する清濁とのかかわりの中で表現したのである。捷解新語の著者とされる康遇聖は、12 歳で日本に連れて来られて以来約 10 年にわたって居住した地域は京阪地域であったことが知られており、この音注を付けた人物は康遇聖自身であったと考えられる。さらに語中での並書による表記についても、高起式・低起式の区別と関係がある可能性があるが、この問題は今後の課題である。

次に、本発表では捷解新語を1つのテキストとして分析した場合、どのような性格を持っているかについて、(1)内容が首尾一貫しており、主人公が設定できるか、(2)内容の現実性・架空性はどのように表現されているか、(3)文体的特徴はどのようなものであるか、という3つの観点を軸として考察した。その結果、(1)に関しては、事実上の主人公である朝鮮の訳官の言動に、いくつかの場面にわたって共通性が見られること、また、前半の倭館での貿易に関する内容は、「中戻り船」の存在を背景として、首尾一貫した筋の運びになっていることを示した。そして、全編を通して、朝鮮の訳官が「仮想的な」主人公と見做せることを主張した。また、末尾の巻9、10の部分の、テキスト全体に対する位置づけについて考察し、全体の構成の中でしかるべく考慮されていることを示した。(2)に関しては、捷解新語は全般的に匿名性が高く、これは物語としての架空性に結びつくものであること、またそれに反する唯一の例外に関する考察を行った。(3)については、捷解新語は、付録を除けば全編対話文からなると考えられてきたが、後半部には、読者への説明と考えられる表現が混在しており、特に巻8末尾は説明文の中に対話文が織り込まれた特異な文体になっていることを示した。さらに、捷解新語の成立時期に関する問題と、内容を解釈する上での日本語表現に関する注意点を取り上げた。